

# 妙満寺の梵鐘について

寺 西 貞 弘

はじめに

妙塔山妙満寺は、現在京都市北区岩倉に所在する、顕本法華宗の総本山寺院である。ただし、寺伝によると、康応元年（一三八九）に、日什が六条坊門室町（烏丸五条付近）に創建したと伝える。<sup>①</sup>その後、応仁の乱に被災後、寺地を転々と移転したが、天正十一年（一五八三）に羽柴秀吉の命により、寺町二条に移転し、さらに京都市内の都市化に伴い昭和四三年（一九六八）に現在地に移転したという。

同寺には、一基の梵鐘が伝来している。後に詳しく述べるが、この梵鐘は、その銘文によると、紀伊国日高郡道成寺（和歌山県日高川町鐘巻）の梵鐘であったことが記されている。なお、道成寺には重要文化財道成寺縁起が所蔵されている。その内容については、すでに詳述している<sup>③</sup>ので、小稿では触れない。この妙満寺の梵鐘銘の拓本が関西大学博物館に所蔵されている。

小稿では、まずこの梵鐘の銘文を詳細に分析したい。その上で、この銘文の信憑性について論じたい。さらに、なにゆえこの梵鐘が妙満寺の

所蔵に帰したのであるのかについて、その経緯を考察することにした。

## 一 関西大学博物館所蔵の拓本

関西大学博物館には「妙満寺鐘拓本」（二幅）が所蔵されている。これは、末永雅雄博士（関西大学名誉教授）の尽力によって、博物館の収蔵資料となった本山彦一コレクションに含まれるものである。<sup>④</sup>本梵鐘が道成寺に里帰りした際に、実見する機会を得た。その際、目視調査の機会に恵まれた。少し離れた場所からオペラグラスを用いての目視調査であったため、法量・重量などを計測することはできなかったが、新聞報道によると、梵鐘の総高は、一・一m、重量は二五〇〇kgということである<sup>⑤</sup>。そこで、まず、関西大学博物館所蔵の拓本銘の翻刻を、次のように行った。

聞鐘聲 智恵長 菩提生

煩惱輕 離地獄 出火坑

願成佛 度衆生

天長地久 御願円満

聖明齊日月 叡筭等乾坤

八方歌有道之君 四海樂無為之化

紀伊州日高郡矢田庄

文武天皇勅願道成寺治鑄鐘」

勸進比丘瑞光

別当法眼定秀

檀那源万壽丸

并吉田源頼秀 合力諸檀男女

大工山田道願 小工大夫守長

正平十四年己亥三月十一日

この梵鐘の胴部分は、四つの池の間に区切られているが、銘文は連続した二つの池の間に刻印されている。刻印が施されている右側の池の間には、八行六七文字が刻印されている。主として、鑄造した梵鐘を讃える文章である。その左の池の間には、六行五五文字が刻印されている。主としてこの梵鐘の鑄造にかかわった人々を列記するとともに、鑄造年月日を明記している。

右の池の間の文章は、最初の三行が、三文字ごとに闕画を設けていることから、三文字一句を八句連ねていることがわかる。これを読み下すと、次のようになるだろう。

鐘聲を聞かば、智恵は長じ、菩提は生じ、煩惱は軽んず、地獄を離れ、火坑を出ずる、成仏を願わば、衆生を度す、



写真1 道成寺に里帰りした妙満寺の梵鐘・2021年10月27日撮影)

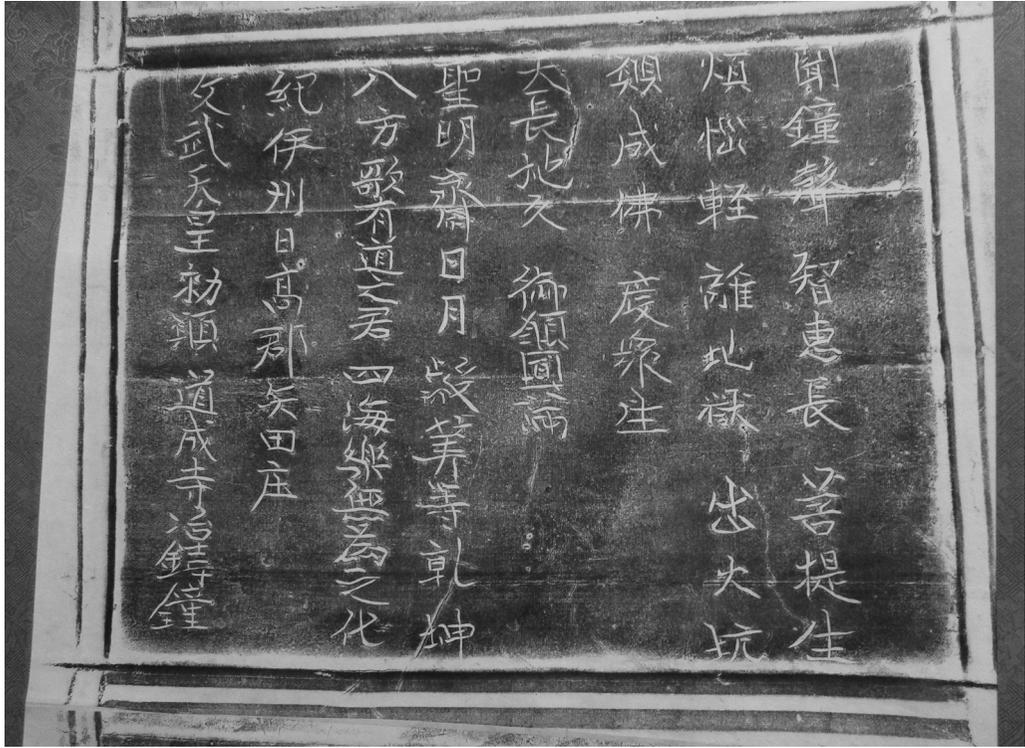


写真2 妙満寺梵鐘拓本上部（右の池の間の銘文・関西大学博物館所蔵）

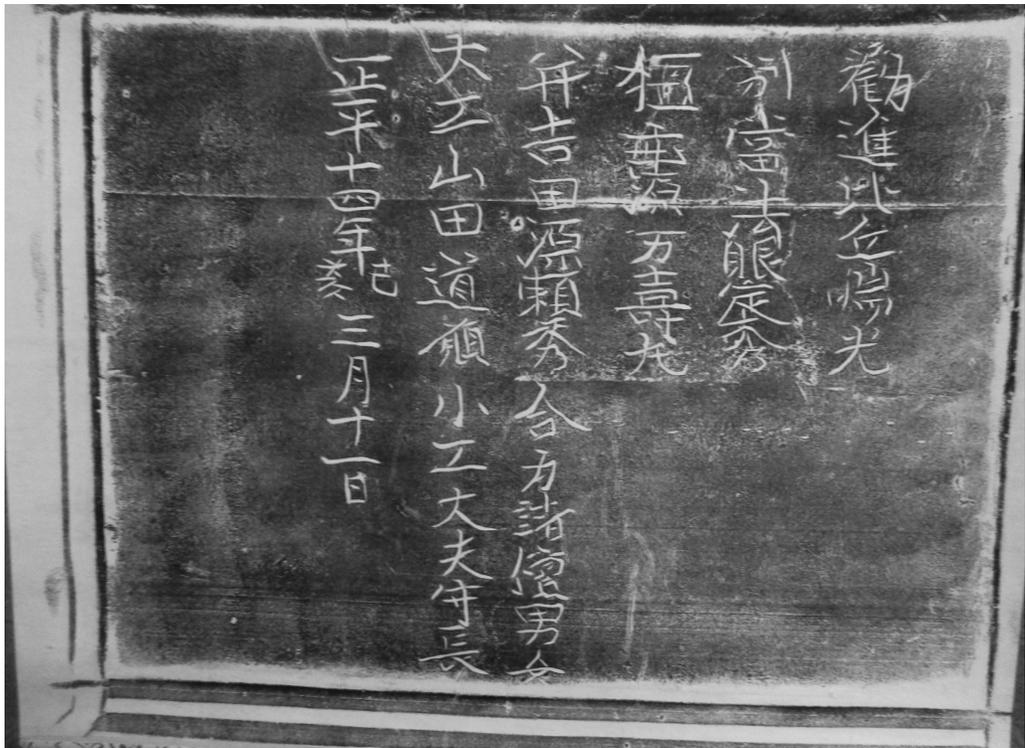


写真3 妙満寺梵鐘下部（左の池の間の銘文・関西大学博物館所蔵）

これは、この梵鐘が放つ鐘の音のすばらしさを讃えたものである。続く第四行目は、四文字一句を二句連ねている。最初の一句「天長地久」は永遠であることを言い表しており、「御願円満」は願いが円満にかなえられるという意味であろう。これは、先の三行で讃えられた鐘の音が永遠に継続するものであり、その鐘の音を聞けば、願いは必ずかなえられるであろうという意味であろう。ただ、ここで注意すべきは「御願」となっていることから、単なる衆生の願いではなく、この梵鐘銘草稿者が敬意を評すべき高貴な立場の人の願いであろうと思われる。これらのことから、四行目の二句も梵鐘の価値を讃えたものといえるだろう。

第五行目は、五文字一句を二句連ねているが、一転して梵鐘を讃える文章ではないようである。「聖明は日月に斉しく、叡箚は乾坤に等し」と読むことができる。聖人の英明は、日月の運行と同様に永遠であり、天子の寿命（叡箚）も天と地と同様に永遠である、という意味になるだろう。

第六行目七文字二句は、「八方は有道之君を歌い、四海は無為の化を樂しむ」と読むことができる。人々（八方）は徳のある君主をたたえ（歌い）、世界中（四海）が当然あるべき為政者の教化を樂しんでいる、という意味になるだろう。それでは、五行目と六行目にみえる聖人・天子・君主・為政者とは、誰を指しているのだろうか。この鐘の作期を示す年号「正平」が、南朝年号であることから、その時点での南朝の天皇である後村上天皇を指しているものと考えてよいだろう。すると、四行目の「御願」とは、後村上天皇の宿願と理解することができるだろう。すなわち、五行目と六行目は、一行目〜四行目で讃えた梵鐘が、後村上天

皇のために铸造したものだという、铸造意図を開陳しているのである。

七行目の「紀伊州日高郡田庄」は、この梵鐘の本来所在した道成寺の所在地である。八行目の「文武天皇勅願道成寺冶铸鐘」は、文武天皇の勅願された道成寺の鐘を铸造するのである、と述べているのである。右の池の間の漢文は、铸造した梵鐘は素晴らしいものであり、それは永遠に継続して鐘の音を聞くものを救うものであり、南朝の後村上天皇を讃えて、道成寺の梵鐘として铸造するという意味を述べているのである。一方、左の池の間には、この梵鐘の制作に携わった人々が列記されている。まず、一行目の「勸進比丘瑞光」はこの梵鐘の铸造を仏教の教理に基づいて指導した僧侶であり、この梵鐘铸造時の道成寺の住職と考えられることができるだろう。二行目の「别当法眼定秀」は、当時の道成寺の事務を統括していた僧侶であろう。

この別当の記載に次いで、「檀那源万壽丸」と記されており、この人物がこの梵鐘铸造の施主である。万壽丸は、正式には逸見万壽丸源清重と称し、清和源氏の一流として、元亨元年（一三二二）に和泉国に生まれたとする。その後、南北朝の争乱期には、南朝方の武将として、紀伊国に侵攻したという。さらに、源（吉田）頼秀の子息の金毘羅丸に、万壽丸の息女が嫁したとも伝えられている。<sup>⑦</sup>

この記述に次いで、次の行に「并吉田源頼秀 合力諸檀男女」という記述がある。これは、前行とともに、「檀那は源万壽丸並びに吉田源頼秀、合力する諸檀の男女」と読むことができる。すなわち、この梵鐘の施主は、万壽丸だけでなく吉田源頼秀の二人だったのである。それでは、万壽丸と頼秀の関係をどのように考えればよいのだろうか。

頼秀は「吉田源」を名乗っていることから、万壽丸と同じく本姓は源であり、一般的には「吉田」を名乗っていたものと思われる。ちなみに『紀伊続風土記』によると、道成寺の所在する鐘巻村の南西に接して吉田村がある。しかも、吉田村の鎮守は八幡宮であるが、その別当寺である雲松寺は、元は道成寺山内に所在したとされている。このように、道成寺と吉田村は非常に緊密な関係にあった。

このような関係を見ると、頼秀は吉田村を基盤とした在地土豪であり、道成寺にかなりの影響力を有した人物だったと推測できるだろう。しかも、万壽丸が和泉国生まれの余所者とすれば、実質的な施主はこの頼秀に他ならないと考えることができるだろう。そして、頼秀に続いて記されている「諸檀男女」は、頼秀や万壽丸に率いられた郎党とその家族と理解することができるだろう。

万壽丸は、南朝方の武將として、紀州日高郡矢田庄に侵攻してきた。その時点で、万壽丸はあくまでも矢田庄では余所者でしかなかった。彼が南朝方として、戦略上この地で優位を得るためには、在地有力者との良好な関係を結ぶ必要があった。そして、万壽丸がまず注目したのは、吉田村を本拠として、在地で権力を誇る頼秀だったのである。

しかも、頼秀は道成寺に大きな影響力を有し、道成寺の復興を目論んでいたとするならば、万壽丸はその目論見に積極的に加担したことであろう。万壽丸にしてみれば、道成寺の復興に加担することも、自らの息女と頼秀の子息とを婚姻させると同様、矢田庄の在地有力者である吉田頼秀を南朝方につなぎとめる方策であったといえるだろう。

なお、五行目の「大工山田道願 小工大夫守長」は、実際にこの梵鐘

の鑄造に携わった鑄工であろう。したがって、「大工山田道願」は、実際に鑄造を指揮した中心人物であろう。「小工大夫守長」は、「小工」が大工を補佐する立場であったことから、山田道願の補佐を務めた人物であろう。

なお、梵鐘の銘文から、この梵鐘の鑄造は、正平一四年（一三五九）のことであることがわかる。ただ、このころ、この梵鐘が鑄造されただけではないと思われる。本堂は、南北朝期に建立されたものと思われるが、その壁板に「正平十二年」の墨書が確認されている<sup>⑧</sup>。また、『紀伊続風土記』の記述によると本堂に葺かれた鬼瓦には、「天授二年（一三七六）」の年号が記されていることがわかる。これらのことから、南北朝ころに大々的な道成寺の復興作業がなされていたことがわかるのである。この梵鐘の鑄造もその復興作業の一環の行為であったとみるべきであろう。

南北朝期に、これほど大掛かりな復興事業が行われていたことから、ある特定の個人による事業だったとは考えられず、少なくとも、道成寺を中心とする地域全体を動員した事業だったと思われる。しかも、正平も天授も南朝年号であることから、これら道成寺の復興を担った勢力は、源万壽丸や源（吉田）頼秀らだけでなく、南北朝期において南朝に心を寄せるこの地の勢力であったと思われる。すなわち、道成寺を中心とするこの地域は、南朝に属していたといえるだろう。

## 二 拓本銘文の信憑性

妙満寺の梵鐘銘について、関西大学博物館所蔵の拓本と、実見した知見をもとに、その銘文の概要を考察した。しかし、別稿（以下、前稿）で述べたように、坪井良平氏の知見によると、現在妙満寺に所蔵されている元道成寺の物とされる梵鐘は、江戸時代に本来の梵鐘を模造して铸造されたものである<sup>⑨</sup>。そして、関西大学博物館所蔵の拓本は、明らかに近世に模造された梵鐘の拓本であることがわかる。以下、小稿では本来の道成寺梵鐘を旧鐘、江戸時代に妙満寺で模造された梵鐘を新鐘と称することにする。

旧鐘は、道成寺から略奪されたのち、略奪した戦国武将によって妙満寺に奉納されたという。そして、安永九年（一七八〇）に出版された『都名所図会』の記述から、その段階で新旧両鐘が妙満寺に併存していたことがわかる<sup>⑩</sup>。私は、前稿において、旧鐘の損傷が激しかったことから、参詣者に拝観させるために、妙満寺が模造の新鐘を铸造したものと結論付けた。そして、その時期は安永九年をかなり遡るころであったと思われる。

坪井氏は、新鐘が旧鐘を忠実に模造している部分がある一方で、全く近世の様式で铸造されている部分があることを指摘しておられる。このことについて、前稿で私は旧鐘を型撮りして、忠実に模造しようとしたが、破損の激しかった箇所については、型撮りすることができずに、近世の様式で铸造せざるを得なかったのだらうと推測した。

坪井氏の観察によると、旧鐘に忠実な部分は竜頭・笠の部分でこれら

は明らかに型撮りをして模造していると思われる。それに対して、上帯・乳の間・袈裟襷・台座は、明らかに江戸期の様式であるということである。このことから、この梵鐘の龍頭と笠の部分は型撮りができるほど良好な状態であったが、上帯・乳の間・袈裟襷・台座は、激しく損傷していたことになる。すなわち、梵鐘の上部（龍頭・笠）は保存状態が良好で、胴部（上帯・乳の間・袈裟襷・台座）は損傷が激しかったということである。

梵鐘を乱雑に移動させる際には、横に倒して転がすことがある。旧鐘もそのようにして移動させたため、胴部の損傷が激しくなったのだらう。また、道成寺から梵鐘が略奪されたのは、戦国時代のこととして伝えられている。略奪した戦国武将は、大砲等の武器への鑄直しを目論んで、かなりの損傷を加えたものと思われる。『紀伊統風土記』もそのような推測をしている。

そして、今問題としている銘文は、胴部の連続する二つの池の間に刻まれているのである。上述のように胴部の損傷が激しかったのであれば、新鐘の池の間に彫り込まれている梵鐘銘は、旧鐘の梵鐘銘を正確に伝えているのであろうか、という疑問が生じるのは当然であらう。このことに関して、上述の坪井氏は、この銘文が旧鐘の銘文内容を、書体は別として、文字を正しく伝えているとされるが、その根拠を明示しておられない。

同様に、乳の間の乳の形状は、全く近世の様式で铸造されているとされる。しかし、坪井氏は各乳の間に四段四列で乳が配列されていることについて、これは旧鐘の配列をそのまま引き継いでいるものと推定され

る。ただし、その根拠はやはり提示されてはいない。おそらく、乳の間は激しく損傷しており、乳も型撮りできないほどに損傷していたが、乳の位置を示す痕跡が残っていたものと推測しておられたのではないだろうか。

このような推測が許されるとしたならば、たしかに胴部は型撮りができないほど激しく損傷していたのである。しかし、突起した乳よりも、池の間に彫り込まれた銘文はよりその痕跡が残りやすかったのではないだろうか。新鐘を鑄造する際に、旧鐘の銘文の痕跡を丁寧にとどめて、銘文を復元したのではないかと思われる。だからと言って、銘文のすべての文字が正確に復元できるほどに、その痕跡を残していたと断言することは決してできないだろう。

ところで、この妙満寺の梵鐘銘は、紀州藩が編纂した『紀伊続風土記』に、行替えや闕画等が忠実ではないが、翻刻文が引用されている。『紀伊続風土記』は、紀州藩が文化三年（一八〇六）に編纂を命じ、紆余曲折の末、天保一〇年（一八三九）に全二九二巻の完成を見ている。儒学者・国学者・本草学者など、紀州藩の学術スタッフを総動員して編纂が進められた<sup>11)</sup>。

とくに、現地調査を厳密に行い、資料調査も現物史料に当たって、かなり正確に行われたことが知られている。妙満寺の新旧両鐘の併存が確認できる安永九年をそれほど下らない時期に、紀伊続風土記編纂スタッフは、必ずや妙満寺の梵鐘を調査したものと思われる<sup>12)</sup>。このように考えると、紀伊続風土記編纂スタッフが、妙満寺において旧鐘銘を見つけたことは間違いないだろう。『紀伊続風土記』に掲載されている翻刻文を次

に掲げておこう。

聞鐘声知慧長菩提生煩惱輕、雖地獄出火坑願成仏度衆生、天長地久御願円満聖明斉日月、叡算等乾坤八方歌有道之君、四海樂無為之化紀伊州日高郡矢田莊 文武天皇勅願道成寺冶鑄鐘  
勸進比丘瑞光別当法眼定秀

檀那源萬寿丸并吉田源頼秀

分力諸檀男女大工山田道願小工大夫守長 正平十四年己亥三月十一

日

新鐘の銘文は、鐘の胴の部分で四つの池の間に区切り、連続した二つの池の間に、鐘銘が彫り込まれている。その左の池の間の五行目後半部分については、新鐘では「合力諸檀男女」となっている。この梵鐘の鑄造に合力した男女がいたという意味であろう。ところが、『紀伊続風土記』では、「分力諸檀男女」となっている。この梵鐘の鑄造に力を分った諸檀の男女がいたという意味であろう。いずれにしても、源万壽丸と吉田頼秀の檀那以外に鑄造への協力者が存在したことを述べているのである。しかし、新鐘の銘文と『紀伊続風土記』掲載の翻刻文はこの一文字が異なっているのである。もちろん、私は活字化された『紀伊続風土記』を見ているが、その活字化の際に誤植があった可能性もあるかもしれない<sup>13)</sup>。そこで、和歌山県立図書館所蔵の和綴じ本の『紀伊続風土記』を見たが、やはり「分」であった。

もし、紀伊続風土記編纂スタッフが、新鐘銘を調査していたのであれば、「分力」とは絶対に翻刻しなかったであろう。新鐘の銘文を一目見れば、「合力」を「分力」と見間違えることはなかっただろう。関西大学博

博物館所蔵の新鐘の拓本を見れば、だれがどのように見たとしても、明らかに新鐘の銘文は「合力」にみえるのである。このことから、紀伊統風土記編纂スタッフは、明らかに新鐘銘を翻刻したのではないことがわかる。おそらく、当時妙満寺の堂内に所在しており、かなりの損傷を受けた旧鐘銘を、苦心して丁寧な翻刻したとしか考えられない。

旧鐘の乳の間は、型撮りができないほどに損傷していた。池の間も、それを区切る袈裟襷文が、かなりの損傷を受けていたものと思われる。このことから、池の間に彫り込まれた銘文もかなりの損傷を受けていただろう。そのため、「合」あるいは「分」の文字については、上の部分だけが確認できる状態であったのだと思われる。それゆえ、スタッフは新鐘の銘文にこだわらず、独自に「分力」と翻刻したのと思われる。「合力」か「分力」かの何れが正しいのか、旧鐘の失われてしまった今となっては、確定することはできない。

しかし、紀伊統風土記編纂スタッフは、新鐘の銘文によらず、旧鐘の銘文の翻刻を独自に行ったものと思われる。その結果、奇しくも「分」の一字以外は、新鐘の銘文とすべて一致したのである。このように考えれば、現在私たちが目になっている新鐘の銘文は、「合」の一字を除いて、坪井良平氏の推測されたとおり、旧鐘の銘文を正確に継承しているものと判断してよいものと思われる。

紀伊統風土記編纂スタッフは、妙満寺において新旧両鐘を実見したであろう。しかし、前記の鐘銘を掲げるに際して、「正平十四年、領主源万寿丸一鐘を鑄て当寺の宝器とす、其銘文左の如し」としている。これは、新旧両鐘のうち、万寿丸らを檀那として鑄造された旧鐘の銘文を掲げる

のだという意味が込められていると考えることができるだろう。

### 三 道成寺梵鐘の移動

小稿では、正平一四年に鑄造された道成寺の梵鐘の作成経緯について、推測を交えて考察してきた。しかし、道成寺のために鑄造されながらも、先述の通り、この梵鐘は、現在京都の妙満寺の所蔵となり、旧鐘は紛失し、それを模した新鐘が現在も残っている。新鐘と旧鐘の関係については、前稿および本稿で述べた通りである。それでは、旧鐘が妙満寺の所に帰したのは、どのような経緯があったのであろうか。次にこの問題について考えてみたい。妙満寺の寺伝によると、次のように伝えられている。

その後、近隣に災厄が続いたため、清姫のたたりと恐れられた鐘は山林に捨て去られました。

それから二〇〇年あまり経った天正年間、その話を聞いた「秀吉根来攻め（一五八五）」の大将・仙石権兵衛が鐘を掘り起こし京都に持ち帰り、妙満寺へと納められました。

これによると、この梵鐘は、忌み嫌われて山中に捨て去られていたということである。そして、天正一三年（一五八五）の秀吉の紀州攻めの際に、秀吉配下の仙石権兵衛秀久によって、この梵鐘が掘り起こされて、彼の手によって妙満寺に奉納されたというのである。

まず、この梵鐘は人々に忌み嫌われていたのだろうか。そして、本当に山中に捨て去られて二〇〇年以上の月日を過ごしていたのであろうか。

もしそうだとしたら、いきなり紀州に攻め込んできた美濃国生まれの仙石権兵衛は、どのようにして二百数十年もの長きにわたって忘れ去られていた梵鐘の所在地を知り得たのであろうか。道成寺には、今でも鐘樓跡の基壇が残っている。そして、坪井氏の観察によると旧鐘を正しく模倣した新鐘の龍頭には、長年鐘樓に吊るされていたと思われる痕跡がたしかに認められるのである。

これらのことから当時、ここに所在した鐘樓に、旧鐘は吊り下げられていたと考えるべきであろう。しかも、室町期に描かれたとされる重要文化財の道成寺縁起には、道成寺の梵鐘が詳しく語られているのである。<sup>⑧</sup> その有名な梵鐘の二代目であるからこそ、略奪されたのかもしれない。ただ、もしそうだったとしたら、その後甚だしい損傷を加えられることはなかったと思われる。略奪者は、当初この梵鐘の何たるかを知らなかった可能性が高いであろう。

それでは、その略奪者は、寺伝に語られているように、まさしく仙石権兵衛だったのであろうか。たしかに、秀吉の紀州攻めに際しては、日高郡の土豪湯河直春を、仙石権兵衛秀久・中村一氏・小西行長らに攻めさせている。<sup>⑨</sup> 直春の立てこもった城は小松原（現御坊市）であり、道成寺とは指呼の距離であることから、権兵衛が湯河攻めの合間に、道成寺の梵鐘を略奪した可能性はあるだろう。しかし、中村一氏や小西行長の可能性はないのだろうか。この妙満寺に所蔵されている梵鐘については、前掲の『都名所図会』に、「道成寺の鐘」という項目を立て、次のように記している。

これ紀州日高郡道成寺の鐘なり、銘あり、兵乱によって伽藍回祿の

後、所々にうつし、遂に天正十六年五月に紀州新宮某、当寺に寄附す、然れども瑾あつて音響遠く至らずゆゑ、この鐘を鑄改めんとて碎かんとするに、大いに振動し、鐘より火焰出づる、衆僧これに驚いてこの事を止めて、新に一鐘を鑄たり、すなはちこの鐘は堂内に蔵む、初は竜頭の下にひびきありしが、次第に癒えて今は平らかなり、

『都名所図会』は、安永九年（一七八〇）に出版されている。秀吉の紀州攻めから約二〇〇年を経過しており、全幅の信頼を置くことはできないかもしれない。しかし、妙満寺への奉納年月を明示している点で、何らかの資料に基づいたのではないかと思われる。また、「紀州新宮某、当寺に寄附す」とある点にはことさらに注目すべきであろう。

この梵鐘は、日高郡道成寺から略奪した戦国武将によって、直接妙満寺に奉納されたのではなかったのである。天正一六年五月に紀州の新宮を経由して奉納されているのである。ただ、仙石権兵衛が奉納したとするならば、なにゆえ新宮を経由する必要があるのであろうか。中村一氏・小西行長が略奪者だと仮定しても、新宮を経由する理由がわからない。

『都名所図会』の天正一六年という年代が正しいのであれば、このころ秀吉から新宮支配を任されていたのは、堀内氏善であったから、「紀州新宮某」とは、彼のことであったと考えるべきではないだろうか。ただ、妙満寺への奉納が、天正一六年五月のことであったとしても、彼が道成寺の梵鐘を略奪したのは、秀吉の紀州攻めが開始される天正一三年三月以前のことであったと思われる。

前掲の『都名所図会』は、たしかに「兵乱によって伽藍回祿の後、所々にうつし」と記している。しかし、その「兵乱」が秀吉による天正一三年の紀州攻めであるとは明言していないのである。妙満寺への奉納が堀内氏善であるとするならば、むしろ紀州攻め以前のことであるとしなければならぬと思われる。

紀州攻め完了後、秀吉は紀州を弟の秀長に授けている。そして、秀長は、和歌山に城代として桑山重晴を、新宮にはそれ以前同様に堀内を、田辺には杉若無心を配置している<sup>⑮</sup>。新宮の堀内が、道成寺の梵鐘を略奪するためには、田辺を通過しなくてはならない。領主秀長に命じられて田辺を治めていた杉若を頭越しにして、天正一三年の紀州攻め完了以後に、堀内がそのような危険を冒すとは考えられない。

また、天正一三年の三月から四月にかけての紀州攻めの最中に堀内が略奪したとも思われない。紀州攻めに際しては、秀吉は陣配りを入念に行って、紀州を隈なく支配するのだと述べている<sup>⑰</sup>。そのため、日高郡に陣配りされた仙石権兵衛らを差し置いて、堀内が道成寺の旧鐘を略奪したとは考えられない<sup>⑱</sup>。そこで、堀内氏善のこの前後の動向を見ることにしたい。

堀内氏は、熊野の在地土豪で熊野水軍を擁していた。氏善は、天文一八年（一五四九）に熊野で生まれた。その後長じて天正九年には織田信長に仕えた。本能寺の変で信長の薨去後、天正一〇年の山崎の合戦では秀吉に属して戦った。その後、氏善は新宮に本拠を構えながら、紀伊国北部へ食指を延ばしたと伝えられている。秀吉による紀州攻め以前の紀州では、小領主が乱立していた。そのため、氏善は秀吉の威光を背景に

して、紀州での勢力拡張を目論んだものと思われる。

当初、秀吉の紀州攻めに、氏善は抵抗したといわれている。おそらく、秀吉の紀州への侵攻以前に、紀州での自分の立場をより確かなものにしたかったであろう。しかし、秀吉の紀州侵攻の意志の固いことを見極めると、一転して紀州攻めに積極的に関わっている。紀州攻め後の自らの立場を有利にしようとしたのであろう。このように考えると、堀内氏善が道成寺の旧鐘を略奪した時期は、秀吉の傘下に属した天正一〇年から、紀州攻めの始まる天正一三年三月までの間とみることが最も妥当であろう。実際にこの間氏善は、紀北に食指を延ばしていたのであるから。

堀内氏善が、道成寺の旧鐘を略奪した目的は、それが歴史的にも有名な梵鐘であることを認識していたのではないと思われる。これまでに述べたように、旧鐘は部分的に型撮りができないほどに損傷していたと思われる。おそらく、堀内は鑄銅製の梵鐘を大砲などの武器への転用を目論んで、略奪したのではないかと思われる。それゆえに、旧鐘を鑄潰すべく、局部的には型撮りさえもできないほどに、損傷を加えてしまったものと思われる。しかし、その作業を進める過程で、その鐘が歴史的に有名な梵鐘であることを知り、しばらく後に京都の妙満寺に奉納したのではないかと思われる。

それでは、氏善はその道成寺の旧鐘が歴史的に有名な梵鐘であることを何時気付いたのだろうか。私は、氏善が道成寺の鐘を略奪した後に行われた秀吉の紀州攻めが大いに関係しているのではないかと考える。新宮の在地土豪であった氏善は、前述の如く道成寺の鐘が何たるかを知らずに、武器への転用を目論んで略奪したのであろう。その後、秀吉は一

○万もの大軍を率いて紀州になだれ込んできたのである。<sup>2)</sup>

秀吉の率いた大軍の中には、京都で豊かな教養を身に着けた武将もいたことであろう。道成寺にほど近い小松原の湯河の城を攻めた仙石秀久・中村一氏・小西行長などは、京都で秀吉に近侍し、公家たちとの交際も頻繁に行っていた。彼らこそが、その様な教養を身に着けた武将であったと思われる。彼らならば、湯河攻めの合間に、歴史的に有名な道成寺の鐘を見たいと思ったことであろう。ところが、その時点で、すでに道成寺の鐘は、氏善によって略奪されてしまっていたのである。和歌山の秀吉の本陣で、そのことが噂されるようになったに違いないだろう。

秀吉は、紀州攻め出陣中に、頻繁に京都の関係者に書状を発給している。これは、紀州での秀吉の優位を京都市中に喧伝させるためであった。京都を留守にしている秀吉が、紀州で優位を保って、必ず勝利の上で京都に凱旋することを、戦いを知らない京都の公家たちに理解させるためであったと思われる。<sup>3)</sup> 当然教養ある公家たちは、道成寺の鐘が何者かに略奪されたことに興味を抱いたことだろう。そして、そのような噂を側聞した氏善は、急遽道成寺の鐘を鑄潰すことを止めて、噂のほとぼりが冷めた天正一六年五月に、妙満寺に奉納したのではないかと思われる。

先に、堀内氏善の動向と秀吉の紀州攻めの陣配りの状況から、氏善が道成寺の鐘を略奪したのは、天正一〇年から同一三年三月の紀州攻めの始まるまでの間であろうとした。一方、氏善が道成寺の鐘の何たるかを知り、その鐘を砕くのを取りやめたのは、紀州攻めの行われている最中のことであったと思われる。もし、氏善が天正一〇年にその鐘を略奪したのであれば、同一三年まで三年の歳月があったことになる。三年もあ

ればその鐘を砕ききってしまったであろう。このように考えると、彼が道成寺の鐘を略奪したのは、天正一三年三月の紀州攻め開始を、それほどさかのぼらないころであったであろうと思われる。

## おわりに

小稿は、京都妙満寺に所蔵する元道成寺のものと伝えられる梵鐘について考察を行った。この梵鐘の元となった旧鐘が鑄造された正平一四年前後の南北朝においては、この梵鐘だけでなく、本堂に関する復興事業が行われていたことを指摘した。そして、それらの事業は、南朝に心を寄せるこの地域の多くの人々を動員して行われたものであることを述べた。

次に、梵鐘の銘文を正確に翻刻し、その意味を解釈した。右の池の間の銘文は、この梵鐘を讃えるとともに、南朝の後村上天皇を讃える意味が込められていることを明らかにした。そして、左の池の間の銘文は、この梵鐘鑄造にかかわった人々が列記されていることを指摘した。中でも、施主として記されている源万壽丸と吉田頼秀について、考察を施した。万壽丸については、南朝の武将として、当地に侵攻してきた人物であった。これに対して、吉田頼秀は、紀州日高郡矢田庄吉田村に本拠を有し、道成寺にも強い影響力を持つ在地の有力者であったと推定した。これらのことから、新参の万壽丸は、当地における戦略的観点から、道成寺の復興を目論む頼秀に、積極的に協力したものと考えた。

さらに、現在われわれが目に見える妙満寺の梵鐘は、坪井良平氏の指摘に基づいて、江戸時代の模造品であることを確認した。そのため、

新鐘の銘文と旧鐘の銘文の異同関係を考察した。その結果、新鐘の銘文は、旧鐘の銘文に関して、一文字を除いてほぼ正確に継承していることを確認した。

最後に、道成寺に本来所在したこの梵鐘が、妙満寺の所蔵に帰した経緯を考察した。妙満寺の寺伝によると、天正一三年の秀吉の紀州攻めに際し、湯河攻めで日高郡を担当した仙石権兵衛によって略奪され、妙満寺に奉納されたと伝承されてきた。しかし、秀吉の紀州攻めにおける陣配りと『都名所図会』のこの梵鐘に関する記述をもとに、この寺伝に疑問を提起した。そして、この梵鐘が新宮を経由して妙満寺に奉納されたとする『都名所図会』の記述をもとにして、道成寺の旧鐘を略奪した戦国武将は、秀吉時代に新宮に本拠を有していた堀内氏善であろうと考えた。彼は、天正一三年三月に始まった紀州攻めをそれほどさかのぼらない時期に、略奪したものと判断した。

以上が小稿の概略である。できるだけ史料に忠実に考察を進めたが、史料不足によって、推測によらざるを得なかった部分も少なくはない。これらの点については、今後の課題といたしたい。

注

- ① 妙満寺の寺伝は、主として同寺のホームページによった。
- ② 秀吉は、天正一四年二月に聚楽第建設に着工しているが、それに先立つて、建設予定敷地内に所在した寺社の移転を命じている。『都名所図会』によると、多数の寺社が天正一一年に寺地を移転させられた例が見える。妙

満寺が秀吉の命によって天正一一年に移転させられたのもこの例であろう。したがって、同年に寺町二条に移転する以前の寺地は、聚楽第敷地内であったものと思われる。なお、『都名所図会』によると、聚楽第の敷地は、「一条の南、二条の北にして、東は大宮を限り、西は朱雀（今の千本通なり）を堺とす」とある。

- ③ 拙稿「道成寺物語にみる熊野参詣」（『古代熊野の史的研究』塙書房、二〇〇四）参照。
- ④ 考古学等資料室「金石文拓本資料」（『関西大学考古学等資料室紀要』三、一九八六）参照。
- ⑤ 読売新聞二〇二二年一〇月二五日付朝刊二九面による。
- ⑥ 北朝年号によれば、文和三年である。
- ⑦ 万壽丸の経歴については、『日高郡誌』（和歌山県日高郡、一九三三）による。
- ⑧ 『道成寺発掘調査報告書』（川辺町教育委員会、一九八〇）による。
- ⑨ 坪井良平氏の所論は、道成寺所蔵の同氏書状写によるもので近年まで活字化されていなかった。その内容については、拙稿「妙満寺梵鐘に関する坪井良平書状」（『関西大学博物館紀要』二八号、二〇二二）において、翻刻およびその大意を詳述しているので、あわせて参照いただきたい。
- ⑩ 『都名所図会』は、『新修京都叢書』六（臨川書店、一九六八）によった。なお、新旧両鐘の関係については、拙稿「妙満寺梵鐘に関する坪井良平書状」（前掲注⑧）に詳述しているので、あわせて参照されたい。
- ⑪ 『紀伊続風土記』は、紀州徳川家が學術スタッフの総力を挙げて、天保一〇年一月に完成させている。その編纂に際してきわめて厳密な資料調査を行うなどの詳細については『和歌山市史』第二卷（和歌山市、一九八九、三尾功担当）に詳しい。

⑫ 高野辰之「道成寺芸術の展開」(『史学雑誌』三八―三三、一九二七)は、万壽丸から数えて一六世の子孫で、幕末維新期の人である瀬見善水の言説を引用して、旧鐘が元治元年(一八六四)七月の妙満寺の火災の際に焼失したことを紹介しておられる。

⑬ 拙稿においては、『紀伊続風土記』二(歴史図書社、一九七〇)を底本として用いている。

⑭ 「道成寺縁起」の概略については、小松茂美『桑実寺縁起 道成寺縁起』(続日本の絵巻二四、中央公論社、一九九二)を参照されたい。

⑮ 『和歌山県史』(中世、和歌山県、一九九四、矢田俊文担当)参照。

⑯ 『和歌山県史』(中世、前掲注⑮)参照。

⑰ 天正二三年四月一三日付、羽柴秀吉書状(惟住越前守宛、『和歌山市史』第四卷、戦国時代五七九号)には、「残す所無く熊野の果迄平均に任せ」と秀吉自身が記している。なお、秀吉の紀州攻めに際しての政治的動向については、拙稿「太田城水攻めの政治的意義」(和歌山大学紀州経済史文化史研究所『研究紀要』二九、二〇〇八)に詳しいので、あわせて参照されたい。

⑱ 「宇野主水日記」(『石山本願寺日記』天正二三年四月一三日条によると、「中村孫平次(一氏)へ御音信、御小袖・馬・樽三、紀州奥郡二先懸已来在陣に付而」とある。また、天正二三年三月二五日付小早川隆景宛書状(『小早川家文書』・『大日本古文書』)によると、「仙石権兵衛・中村孫平次・小西弥九郎其外人数、湯河館に至るべく指遣わし候処」とあることから、この書状発給の翌日である三月二六日には、小松原への陣配りが完了していたものと考えられるだろう。

⑲ 堀内氏善の経歴については、『寛政重修諸家譜』第七四四の藤原氏師尹流堀内の項によった。

⑳ 「イエズス会日本年報」(『新異国叢書』)に収める天正二三年一〇月一日付ルイス・フロイスの書状によると、秀吉が率いた紀州攻めの軍勢は、「十万を超えた」と記している。

㉑ 紀州攻め期間中の秀吉の書状については、拙稿「天下人秀吉と和歌浦」(『日本史の中の和歌浦』塙書房、二〇一五)に概略を記しているので、あわせて参照願いたい。

